

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭 © JASE. 2012 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents	第12回アジア·オセアニア性科学学会報告 · · · · · 1 北丸雄二のニューヨークリポート⑳ · · · · · · 6 「ありのままのわたしを生きる」ために⑳ · · · · · · · 7	今月のブックガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
----------	---	---

■第 12 回アジア・オセアニア性科学学会報告

アジア・オセアニアにおける性の健康の普及推進

(Promotion of Sexual Health in Asia-Oceania)

大阪府立大学地域保健学域(教育福祉学類)教授 WAS (世界性の健康学会)性の権利委員会委員長 東 **優子**

「出雲の国」で性を語る

づき)」と呼ぶ。その由来は、年に一度の会議に出席するため、全国の神様が出雲大社(島根県出雲市)に集まり、出雲以外には神様がいなくなってしまう、という神話にある。逆に、神様の集まる「出雲の国」では、この旧暦10月を「神在月(かみありづき)」と呼ぶ。2012年8月2日から5日までの4日間、神話に登場する王国を舞台に、第12回アジア・オセアニア性科学学会(会長・大川玲子)が開催された。世界的な経済不況に加えて、とくに東日本大震災の爪痕深い日本での開催とあって、参加者の出足が鈍ることも予想された。しかし、そうした悲観的な予想に反してふたを開けてみれば、会場となった"くにびきメッセ"(松江市・島根県立産業交流会館)には、世界16か国から270名余りが参集し、熱心な学術交流のほか、波

古くから日本では、旧暦10月を「神無月(かんな

多野芳郎・副大会長の 尽力によって実現した 出雲観光ツアーやフォ ーゲル・パーク (花 鳥のテーマパーク) の懇親会、伝統芸能の アトラクション (安 の か 、石見神楽)などを 通じて、心温まる国際 交流が展開された。

また、アジア・オセ アニア性科学学会松江 大会を共催する形で、 「第42回全国性教育研 究大会」と「第32回日



本性科学学会」が同時開催されたことで、参加人数も 増え、そのことが学術プログラムの内容の充実にもつ ながった。

アジア・オセアニア性科学学会 (AOCS) とは

アジア・オセアニア性科学学会(Asia-Oceania Congress of Sexology:AOCS)は、アジア・オセアニア性科学連合(Asia-Oceania Federation of Sexology:AOFS)に加盟する国が持ち回りで組織委員会を発足させて主催する隔年会議である。WAS(世界性の健康学会、旧・世界性科学学会)主催の国際会議と交互に開催される。

AOFS の歴史は、アジア性科学連合(AFS)として発足した 1990 年にさかのぼる。2004 年にオーストラリアやニュージーランドなどが加わったことで、アジア・オセアニア性科学連合に改称された。

日本で AOCS が開催されるのはこれが2回目である。1995年の横浜・WAS 国際会議を含めれば、日本で性科学に関する国際会議が開催されるのはこれが3回目で、過去2回は故・松本清一先生(自治医大名誉教授、日本家族計画協会会長=当時)が会長を務められた。松江大会の2年後はオーストラリアがホスト国となり、ブリスベンで第13回大会が開催される予定である(下表参照)。

AOCS ホスト国(一覧)

1990	香港	2004	ムンバイ (インド)
1992	上海 (中国)	2006	バンコク (タイ)
1994	ニューデリー (インド)	2008	北京 (中国)
1996	台北 (台湾)	2010	バリ (インドネシア)
1998	ソウル(韓国)	2012	松江 (日本)
2000	神戸 (日本)	2014	ブリスベン (豪)
2002	シンガポール	2016	韓国※

※開催地未定



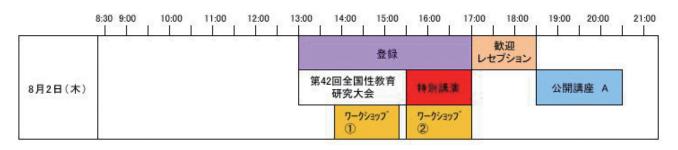
開会式で挨拶にたつ AOCS 松江大会・大川玲子会長

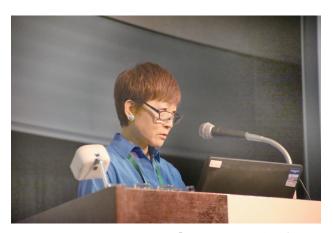


歓迎レセプションの様子

なお、世界性の健康学会(WAS)にはアジア・オセアニア(AOFS)のほか、アフリカ(AFSHR)、ヨーロッパ(EFS)、南米(FLASSES)、北米(NAFSO)と、世界5大陸すべてに下部組織が存在している。そこで今年は、それぞれの地域において AOCS 松江大会と同じような国際(隔年)会議が開催されているのである(※ WAS は団体会員と個人会員で構成されている。AOFS などに加盟していない団体・個人でも、審査・承認を経て WAS の会員登録をすることができる。

詳しくは、http://www.worldsexology.org/を参照)。





長谷川真理子氏による基調講演「性の進化とその帰結」

多彩な学術プログラム

学術プログラムは、一般口演(31)、ポスター発表(36)、特別講演(1)、会長講演(1)、基調講演(3)、シンポジウム(12)、ランチョンセミナー(4)、ミニレクチャー(4)、スペシャルセッション(6)、ワークショップ(3)、市民公開講座(2)などで構成され、網羅されたテーマの豊富さはまるで「性科学の見本市」である。

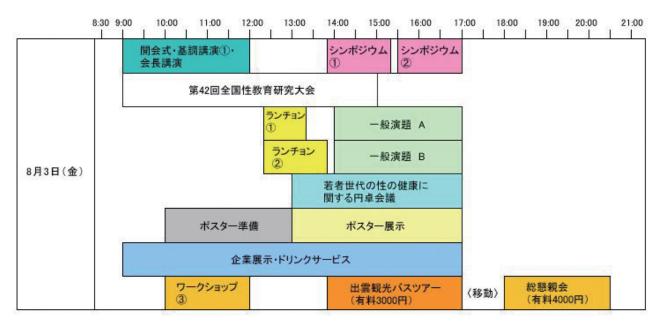
たとえば、シンポジウムのテーマだけを羅列してみても、「性犯罪」「性感染症」「男性の加齢とセクシュアリティ」「ピア教育」「日本の青少年のセクシュアリティ」「女性が性を楽しむために」「大学におけるセクソロジー教育」「HIV/AIDS: MSM 予防介入」「射精障害」「性同一性障害に関わる性別適合手術」「HPV ワクチンの普及啓発と性教育」「トランスジェンダーの健康」な



若者円卓会議の関連企画・公開座談会「マスタベーションと 性の健康」の様子

どがずらりと並ぶ (タイトルは一部省略)。ランチョンセミナーでは「障碍者と性」「緊急避妊の現在・将来」「妊娠中絶リピーター防止対策」、市民公開講座では森岡正博氏による「草食系男子はなぜ登場したのか」など、今日的話題も多く取り上げられた。

医学・医療、社会学、心理学、教育学、生殖・生物学、文化・政治など、学際性豊かなプログラムが実現したのは、組織委員会が日本性科学連合に加盟する7団体(日本性教育協会、日本家族計画協会、日本思春期学会、日本性機能学会、日本性感染症学会、日本性科学会、性の健康医学財団)の代表者で構成されていたことによる。また、過去のAOCSには「男性の性機能」に偏った大会もあったが、今回のプログラムにおけるバランスのよさは、学術プログラム委員長・池上千寿子氏および、副会長兼同委員会顧問の宮原忍氏によるところが大きい。





シンポジウム「日本の青少年のセクシュアリティ」報告メンバー

海外から参加した主な顔ぶれとしては、AOFSの 創立に尽力したことでも知られるウング教授(香港)、 2015年の WAS 国際会議会長・アダイカン教授(シン ガポール)、第11回 AOCS 会長で AOFS 会長のアリ メリヤ教授 (インドネシア)、第10回 AOCS 会長のフ ー教授(中国)、第13回 AOCS 会長のレーデルマン 教授 (オーストラリア)、第14回 AOCS 会長の朴教 授(韓国)などが参加。さらには、WAS役員である フランス国立衛生医学研究所のジアミ教授、WAS学 術委員長ドートリー准教授 (オーストラリア)、WAS 性の権利委員会委員ティリー氏 (オーストラリア)、 日本の性教育者にはすでにお馴染みのダイアモンド 教授(米国)、トランスジェンダーの国際的専門職組 織 WPATH (World Association for Transgender Health) の役員であるウィンター准教授(香港)など の存在も、本大会の国際性に彩りを添えていた。

残念だったのは、基調講演が予定されていた WAS

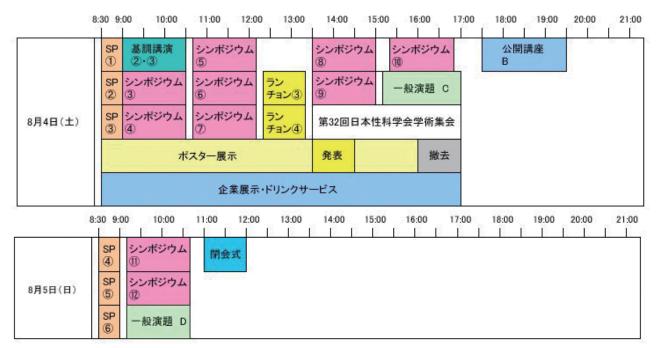
のローズマリー・コーツ会長が、病気を理由に、急遽来日を中止せざるをえなくなったことである。幸いにも、会長挨拶については彼女からの親書をジアミ教授が代読する形で、また基調講演「ICD(WHO 国際疾病分類)2013の挑戦と変化」については、偶然にも彼女と同じ WHO の ICD 改訂作業部会に所属していたウィンター准教授を代役に立てることで、すべてがうまく収まった(その後間もなく、彼女は WAS 会長という大役をも辞職することになったが、現在も引き続き WAS 役員として活躍中である)。



WAS 若者部門ユース・イニシアティヴのロゴ

若者円卓会議

国内の性科学や性教育が直面している深刻な課題の ひとつは、「次世代育成」である。諸外国の国際学会 で出会う若者参加者の数は決して少なくないが、日本 では、国内の関連学会でも(医学・看護系を除いて) 若い世代を見かけることなどほとんどないのが現状で





ワークショップでのひとこま

ある。しかし、今回は少し事情が違った。

まず、「世界における性の健康と性の権利の推進」をミッションとする WAS が 2010 年より展開している「世界性の健康デー」(9月4日)の関連イベントとして、松江大会の会議場メインホールで「世界性の健康デー・公募ポスター展」が開催された。応募者の多くは専門学校・美術大学の学生で、会場に姿はなくとも、作品を通じてその存在を感じることができた。

また WAS の若者部門として新設されたユース・イニシアティヴの副代表(心理学専攻のメキシコ人大学生)が来日し、初の「若者円卓会議」も開催された。若者委員会の主な活動目的は、「21世紀の若者の性の健康」について世界中の若者から意見を収集し、若者の性の健康に関する活動を世界的に展開していくことにある。そこで、世界5大陸で隔年会議が開催されている今年、それぞれの地域で若者円卓会議を開催することになったのである。

ホスト国の窓口となったのは、日本家族計画協会・若者委員会(U-COM)の元代表である柳田正芳氏(現・「Link-R:若者世代にリプロヘルスサービスを届ける会」の代表)。彼の熱心な働きかけにより、参加者への奨学金制度(提供:TENGA)や、円卓会議関連イベントとして「公開座談会」も実現した。

参加者の顔ぶれは U-COM の現役メンバーほか、これまで学会とは接点のないところで性の健康に関連する活動を展開してきた若者たちである。性の健康を推進するにあたって、こうした若者の主体的取り組みがいかに重要であるかは、強調するまでもない。今回の実績が評価された柳田氏は、WAS 若者委員会のメンバーにもなった。国内の性教育/性科学の活性化につながる、今後ますますの活躍を期待したい。

来年は、ブラジルでの WAS 国際会議

短くも、充実した4日間が過ぎ、AOCS 松江大会は無事終了した。慣例に従い、大川玲子・組織委員会委員長(学会長)は2014年まで AOFS 会長を務めることになる。

松江とブリスベンの間にあるWAS国際会議は、来年ブラジルで開催される。国際会議への参加は、旅費・宿泊費・参加登録料など経済的負担が大きく、日本語通訳がつかないために敬遠する人も多い。奨学金制度があっても、発展途上国が優先されるため、日本のような先進国では、経済的に恵まれない民間ボランティア団体で活動する人々や学生などが、こうした恩恵を受けられることはほとんどない。ICTが格段に進歩した現在、ウェブ中継など、新しいツールの導入が具体的に検討される時期にきているとも思う。しかしやはり、人と人がじかに出会い、交流することによってもたらされるエネルギーは量り知れず、エンパワメントこそが国際会議の醍醐味であると思う。

「安・近・短」とは程遠い南米で開催される国際会議ではあるが、AOFS 学会事務局(日本)の新メンバーに加わった小貫大輔氏(東海大学准教授)は、ブラジルと日本のかけ橋となる活動で知られ、学会参加ツアーの中心的存在としても活躍していただけそうである。WAS 国際会議は、その規模や内容の違いゆえに、AOCS とは異なる経験を提供してくれるはずである。この機会にぜひ、若者を含む、ひとりでも多くの方に、欧米とは異なる文化・社会をもつ彼の地で開催される国際会議に参加していただきたいと願っている(ツアー参加募集は、本誌でも告知される予定)。



閉会式後に記念撮影する AOFS 役員

北丸雄二の

Sexuality Now

ニューヨークリポート



カミングアウトしたストレート男性の物語

ティモシー (ティム)・クーレック (26) はとても 保守的なバイブル・ベルト (聖書地帯) の街とされる テネシー州ナッシュビルに育ちました。幼い頃から通 った超右翼の教会では自分はキリストの兵士なのだと 教え込まれました。大学も「福音派の陸軍士官学校」 とあだ名されるリバティー大学に通いました。異性愛 者の彼にとって、ゲイの人物とは神への冒涜以外のな にものでもなかったのです。

しかしあるとき、一緒に行ったカラオケバーでエリザベスという同じクリスチャンの友だちが涙ぐみながら打ち明けたのです。「昨日、家族にカムアウトしたの。パパに、荷物をまとめてオレのうちから出て行けと言われた。ヘンタイの娘(faggot daughter)に出してやる授業料などびた一文ないって言われた」

彼の肩で泣き崩れるエリザベスに彼はなにも言わずに自問します。「自分は彼女に憎悪を感じている。彼女が悪い人だからじゃなく、彼女が同じ女性を好きだという理由で。その1つのことで自分にものすごい憎悪が生まれるのを感じる。この憎悪は何だろう? 聖書は人を愛せと言っている。この憎悪がイエスの声であるはずがない。じゃあ、いったいこの声はどこから聞こえるのだろう?」

聖書と教会とのはざまでティムはその憎悪の正体を探ろうとします。どうやって? 彼は、自分から憎悪の対象である者たちの側に立って、自分に向かってくるだろう憎悪を見てみようと思ったのです。こうして彼は丸1年間、「ゲイ」として"カムアウト"して生きてみた――その記録がとても興味深い本になりました。The Cross in the Closet(『クローゼットの中の十字架』)。このクロスという単語には「十字架」の他にも「試練」、さらには「掛け合わせ、混じりもの」といった意味も掛けられているでしょう。

こうした試みは「社会実験」と呼ばれます。1961

年には人種差別が苛酷だった米最南部で白人男性ジョン・ハワード・グリフィンが黒人に扮して味わった体験を Black Like Me(『私のように黒い夜』)に著して大変な反響となりました。2006年には女性人類学者ノーラ・ヴィンセントが「ネッド」という男性に扮して過ごした1年半の記録 Self-Made Man(『自作の男』)が刊行されています。最近ではものすごい高齢の老人として暮らしてみた若い女性の手記とビデオもありました。

もっとも、「カミングアウト」をするまでティムは 半年にわたって逡巡します。なにせ超保守的な土地 柄。最も刺激的な嗜好品は麻薬ではなくてアイスティー、高級カントリー倶楽部の会員より福音派の教会の 信徒のほうがステイタスがあって、シャチを救う映画 「フリー・ウィリー」は環境保護主義のリベラル映画 だからダメ、サンタクロースは聖書にないからダメ、 ハロウィーンは邪悪な休日だからダメ。言うまでもな くゲイなんかはもっての外で「HIV 感染の倒錯者で 少年愛の犯罪人」と断罪される地域なのです。

それでも自分の計画が頭から離れないティムはついに親友のジョシュに相談します。そもそもカラオケに行き始めたのも彼が最初に誘ったからで、そのせいでエリザベスの告白につながったのです。ジョシュにもこの計画に噛んでもらわねばならない、と思ったのです。いつもの会話の後でティムはためらいがちに彼に伝えます。「ところでさ、オレ、家族と友だちぜんぶに"カムアウト"しようって思うんだ」。驚いたジョシュが言います。「何だって? でもおまえ、ゲイじゃないじゃん! ……え、そうなの?」

そうして彼の波乱の1年間が始まりました。

キリスト教という確固たる信念のもとにゲイ差別を 行うアメリカ社会と日本とを単純に比較することはで きませんが、差別というものの本質は垣間みることが できるかもしれません。手に汗握るティムの体験の続 きは、来月のこのコラムでご紹介しましょう。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住(19年)ジャーナリスト/作家/元・中日新聞(東京新聞)ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第20回

やっと出会えた仲間

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード 状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交 流会運営で右往左往する日々を送っている。

秋は、わたしにとっては「疲れ」のたまってくる季節です。ついイライラして生徒を怒りそうになる自分をどうコントロールするかが、秋のわたしの課題です。

閑話休題。

1997年当時、ようやくネットの中に「仲間」を見つけたわたしでしたが、やはり生身の人間と会いたいと思っていました。そこで、Sさんにつれられて、何度かレズビアン・ゲイの人たちの集まりに行きました。そこは、それまで出会ったことのない人々がいて、話したことのない話題でもりあがる、とても居心地のいい場所でした。しかし、「トランスジェンダーである自分の場所ではない」という思いがぬぐい切れませんでした。ある集まりに行ったとき、麻古仙女さんという方がおられました。彼女ははじめてお会いした生身のトランスジェンダーでした。「いた! ほんまもんや!」と思いました。しかし、トランスジェンダーの草分けの一人とも言える麻古さんは、わたしにとっては雲の上の人でした。あいさつするのが精一杯でした。

それから2年経った1999年に、わたしは玖伊屋の記事を見つけたのです。玖伊屋の記事は、「自分のことを伝えるチャンス」という以上に、わたしの心を揺さぶりました。それは、同じ京都の中に仲間のコミュニティがあるという衝撃でした。しかし、その時わたしはすぐに行こうとは思いませんでした。普段はどこにでも気軽に出かけていくのに「京都市内は遠いから」と、夜遊びなんて平気なのに「泊まりがけになるから」と、なにかと理由をつけて、玖伊屋に行くのを躊躇していました。その時は、単に知らないところに行く不安だと思っていました。しかし、今振り返ると、それは最後の一歩を踏み出すことへの躊躇だったのでしょう。一度玖伊屋に行ってしまうと、「ほんとうにもどれないところ」に行ってしまうかもしれないという、恐怖にも似た思いがあったのかもしれません。

そんなある日、在日外国人生徒交流会の卒業生Kに会いました。Kはかつて、同性愛についての勉強をはじめたわたしに「自分は実はレズビアンなんだ」、そして「こ

れでやっとわたしの残り半分を知ったね」と言ってくれました。わたしはKに自分の変化を伝えるために「実は自分はトランスジェンダーなんだ」と言いました。すると、「玖伊屋に来たら? 実はいま、玖伊屋でバーテンをしてる。主宰者のまりあさんは土肥ちゃんにとっても似てるよ」と言いました。わたしの心は大きく揺れました。それでもわたしは玖伊屋に行こうとはしませんでした。そんなわたしに、ある日Jさんは言いました。「あんた、行きたいんやろ? 行ってきたら?」。その言葉に背中を押されて、1999年3月に玖伊屋に行くことにしました。

やっとの思いでたどりついた会場の風景は今でも忘れることができません。部屋の中には大きな机、その上にはポテチの袋がひとつだけ。みんな会話もせず女装雑誌を読んでいます。「こんなところ、二度と来るものか」と思いました。それでもスカートに履き替え、軽くメイクをして、その場にいることにしました。夜も更けて、午前4時頃のことです。ゆっくりとした曲が流れていました。思わず体をゆっくりと左右に揺らしました。スカートの裾がふわふわと左右に揺れました。その瞬間、「ああ、わたしが求めていたのは、これだったんだ」と思い、涙が出そうになりました。

参加者の中に一人だけ、なんとなく「話があいそうな人だなぁ」と感じた人がいました。その人が主宰者の阿倍まりあさんでした。ひとこと言葉をかわしただけで、二人の間に通じるものを感じました。わたしはまりあさんと夢中で話しました。学生運動のこと、差別問題のこと、その内容のほとんどが、トランスとは関係ない話でした。その日、まりあさんは、生まれてはじめて得た「仲間」なんだと、わたしは確信をしました。1か月後、わたしはまりあさんに会いたくて、再び玖伊屋に参加しました。その後、わたしは玖伊屋の常連となり、さらにスタッフになるのですが、それはもう少しあとの話です。

部落や在日の子どもたちが交流会の前で躊躇する気 持ちが、今のわたしなら痛いほどわかります。しかし、 そこをぴょんと飛び越えたとき、案外おもしろい世界が 待っていることもまた、今のわたしは知っています。

BOOK GUIDE 今月のブックガイド



精子提供 父親を知らない子どもたち

歌代幸子著 新潮社 1680 円 (税込み)

AID の子どもたち

著者はノンフィクションライターで、7年をかけ、非配偶者間人工授精(AID)を追ってきた。AIDとは、夫以外の男性から提供された精子を用いる人工授精を指す。日本では、戦後まもない1948年に、無精子症など男性不妊に悩む夫婦のため、慶應病院で始まった。60年余が経ち、累計1万人以上の「AID児」が誕生している。これは、卵子や受精胚の提供、代理出産など、生殖医療の激動の時代の幕開けだった。なぜ子どもが欲しいのか、家族とは、親子とは、誰のための命なのか、根源的な命題が問われている。

AID を受ける親は、これまで医師や看護師から秘密にするように指導され、ひた隠しにしてきた。その歴史を知ると、主役が医師で、準主役が親たちという印象を受ける。民法上、子らは実子と見なされ、「AID 児」の存在は消され、男性不妊の隠れ蓑にもなってきた。

AID で生まれた子どもたち、ようやく真打ちが当事者として浮上したのは、比較的最近のこと。まるで小説か映画のような衝撃的な出来事が、発端だった。

2003年、当時医学生だった加藤英明さんは、臨床検査の実習でたまたま自分と両親の血液を調べ、父親と血縁が無いことが判明した。青天の霹靂だった。母親に真実を尋ね、29歳にして初めて、自分が AID で生まれたことを知る。親に出自を隠蔽されてきた怒りや悲しみ、自分の思いを誰にもわかってもらえない孤独感を味わった。遺伝上の父親捜しを始めるが、精子提供者は原則匿名の鉄壁が、立ちはだかっていた。

これまで、可能な医療技術を用いた先にある、子どもの人権、福祉の視点が社会的に欠落していたことに気づかされる。出自を秘匿するとは、単純に"告げない"では、済まない。時には嘘を塗り重ね、親子や夫婦の信頼関係を危ういものにし、子どものアイデンティティの中

核にも関わる問題なのだ。精子提供者からの遺伝病や、 異母きょうだいとの近親婚の恐れもある。

著者の取材期間、AID の子どもたちが声を発したことを機に、自助グループが立ち上がり、実名を出すメンバーも現れ、"当事者主権"のうねりが起きた。それに応じ、子どもの思いや幸せを中心に、生殖医療とそれに伴う社会システムを変えようとする動きが始まる。

今や、望めば、誰でも遺伝子検査を受けることができ、何かの拍子に事実が明るみになる可能性が常にある。親にとっても隠し通すには重い事実を、父親の大病や死、両親の離婚に際して子どもに知らせてしまい、子どもがダブルショックに見舞われる例も少なくない。

慶應大学小児科、小児精神保健医の渡辺久子さんは、 事実を知り衝撃を受けた子らの心理的支援を行っている。AIDで子どもをつくろうとする親の中にも、子への 告知を考える人たちが増えてきた。AID医療に携わる 医師にも、子の知る権利を尊重する動きが出てきた。

著者は、子や親たちの思いに耳を傾ける一方、生殖医療に携わる医師たちや、精子提供をした元医学生、男性不妊に悩む夫婦にとって AID 以外の選択肢一養子縁組みや、子どもを持たない人々も取材。様々な角度から、闇に沈んできた AID に光を当てようと試みている。

イギリスやオランダ、スウェーデンなど、子どもに対し、精子提供者を知る権利を認める法制度を持つ国は増えている。海外では、レズビアンのカップルや、シングル女性の利用者も多い。日本でも、女性から男性への性同一性障害者が、結婚後、AID 児をもうける例も出てきた。ひとたび、子どもたちの生々しい苦悩の訴えを耳にして、それ以前に還ることができようか。未だ、日本では、プライバシー尊守を理由に、実態調査も進まない。厚生科学審議会「生殖補助医療部会」から2003年、「出自を知る権利」を認める答申が出されたが、法制化反対の動きで、棚上げになったままだ。まずは、深く知ることから始めよう。 (フリーライター まつばら けい)

JASE Information

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、 FaxO3-5800-0478でお寄せください。

〒112-0002 文京区小石川 2-3-23春日尚学ビル B1 日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

1

>> 12月23日(日)13:00~17:00 <<

関西性教育研修セミナー2012 冬

児童生徒の性暴力被害に対する学校での危機対応

~スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの実践から~

内 容 「学校危機対応の基本と被害者へのケア〜スクールカウンセラー・SV の立場から〜」藤森和美 (武蔵野大学) 「学校危機後の学校支援〜ソーシャルワーカーの立場から〜」金澤ますみ (大阪人間科学大学) コーディネーター:東優子 (大阪府立大学)、野坂祐子 (大阪教育大学)

会場関西学院大学 大阪梅田キャンパス K.G. ハブスクエア 1004 号室 (大阪市北区茶屋町 19 - 19)

参加費・問合せ先等

参加費 / 1,000 円 (資料代) **定 員** / 80 名 (先着順・予約制) **対 象** / 子どもへの支援・教育に関わる方、テーマに関心のある方。 **主 催** / 関西性教育研修セミナー運営委員会 **協 賛** / 大阪府立大学人間社会学部コラボ支援推進室、日本性教育協会 **問合せ先** / E-mail higashi@sw.osakafu-u.ac.jp (お名前・所属・連絡先を明記してお申込下さい)



『青少年の性行動』

一わが国の中学生・高校生・大学生に関する 第7回調査報告―(2011年調査)

編集/(財) 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 (JASE)/「青少年の性行動全国調査委員会」 ◆A4判:72頁、頒価1,000円

〈性教育ハンドブック〉ー

- ⑤ 『21 世紀の課題 = 今こそ、エイズを考える』 池上千寿子著 A5 判・68 頁 500 円
- ④『性教育の歴史を尋ねる~戦前編~』 茂木輝順著 A5 判・92 頁 500 円

〈性科学ハンドブック〉 -

- ⑫『腐女子文化のセクシュアリティ』 A5 判・96 頁 500 円
- ①『思春期の性衝動~男の子の性を考える~』 A5 判・78 頁 400 円
- ⑩『がん患者・家族のセクシュアリティ』 A5 判・74 頁 400 円
- ⑨ 『性情報とメディア・リテラシー』 A5 判・80 頁 300 円
- ⑧『江戸のセクシュアリティ&笑い』 A5 判・64 頁 400 円
- ①『セクシュアリティと心理学の最前線』 A5 判・74 頁 300 円
- ④『データ解読: 現代のセクシュアリティー』 加藤秀一著 A5 判・84 頁 300 円

『セクシュアル・ヘルスの推進・行動のための提言』 日本語版監修/松本清一・宮原忍 B5 判 64 頁 800 円

※以上在庫のあるものです。送料: 1 冊 210 円、2 ~ 3 冊 290 円、4 冊 340 円、5 冊以上は無料。

◆ JASE ホームページ http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html からお申し込みいただけます。または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

◆日本性教育協会編著の書籍◆

『「若者の性」白書―第6回・青少年の性行動全国調査報告―』

(2005年調査)

日本性教育協会編 発行/小学館 定価 2,000 円 + 税 A5 判・224 頁 (残部僅少)

※一般書店での購入が難しくなっています。ご希望の方は JASEまでお問い合わせください。



『思春期の性の健康を支える

ピアカウンセリング・マニュアル』 高村寿子編著 発行/小学館 ピアカウンセラー(学生)版 定価 1,500 円 + 税 A4 判・128 頁 ピアカウンセラー養成者・コーディネー タ(調整役)版

定価 2,000 円 + 税 A4 判・176 頁

※全国の一般書店 で購入いただけま す。

